

# (六) 築地本願寺 へ 納材

昭和六年頃、東京の築地本願寺が再建される事になった。これは関東大震災で焼失したものを今般再建するのであるから、地震に強い、火災で燃えない建物と云う条件であった。設計は深川八幡で有名な、伊藤忠太博士、外装は全部インド洋式とかで、鉄筋コンクリート。内装の一部だけ檜造りだ云う事である。鉄骨鉄筋コンクリート造りだから、柱間が広い。内陣の柱間が九十尺(十五間)両脇が各十八尺(三間)更に両袖二十七尺(九間)の柱間に無目敷居が入用との事である。

檨 無節 厚サ五寸(椶挽き)

巾三尺一寸

長き 三十八尺 一枚

” 二十七尺 二枚

(三枚で九十尺使い)

” 二十七尺 二枚

” 十八尺 二枚

右の無目敷居用材は一番至難で、その他の組物用材は問題にならない程簡単な注文品であった。内陣と外陣境の柱間九十尺の一枚板は物理的に不可能で、結局三十八尺と二十七尺式枚(継手共)計三枚で継ぎ合わす事に了解を得た。本願寺の現場には、前にも書いた奥

山由雄氏、高柳寅次郎氏が元気で活躍されていた。外材時代の今日でも、容易に得られる代物で無い。特に檨材である。私の店の企業秘密であった、例の全国立木調査帳を詳細に調査すると、茨城県に存在すると記録されている。

檨 立木 直材

目通り 一丈八尺 一本

目通り 一丈七尺 一本 計式本

所有者は別々である。調査したる処、現在も実在して居る。所有者に売却

の姿も  
私の店  
の調査  
通りで

あったが、所有者売却の意志無しには困った。然し外に各地を調査したが適当な立木は見当ら無い。早速父自ら出向いて、立木所有者に、用途は築地本願寺へ納材する事等を口説きに口説いて漸く売却方へ漕ぎつけた。所有者は仁保雄三郎氏、所在地は茨城県真壁郡岩瀬町郊外の同氏宅、裏山の附近の竹林の中に生育。代金は一本式円円位だったと思う。

仁保家は当地方の旧家の資産家で、明治天皇、茨城県御巡幸の時宿泊されたとの事で、玄関入口の



土堀に白線が入っていたことを覚えていた。当主雄三郎氏は六十才過ぎの老紳士で、明治大学第一回の卒業生だそうであった。私は、昭和五年に商業学校を卒業して、既に社会人として家事に従事しており、後学の為め、この現場に参加した。それは立派な立木であった。私は今日迄、未だこれ以上の立木は見つ事は無い。当時の写真はこの立木「手(かねの手)」に影映してあるから、如何に真直な立木であったかは、よく解ると思う。右立木一本では量的に不足した

力蔵配下の太田多市・橋爪武司・蓑輪番作氏四名で、現場で造材し製材品として東京、探川に搬入し人工乾燥後築地本願寺現場へ納入した。富山商工会議所主催の創業百年企業紹介に出展した「築地本願寺へ納入檨材造材現場」の写真に昭和五年於茨城県とあるのは昭和七年の誤りにつき訂正すべきである。これ等の記録写真は例の帖箆筒で戦災焼失した為、戦後、私

が中村力蔵氏の遺族から借りて複製したものである。築地本願寺は前にも書いた通り、地震に強い、火災に燃えない構造と云う事で、この時代に先見していた。全く然りである。父が苦心して納材した。富山西別院は昭和十四年五月三十日、深川八幡宮は昭和二十年の戦災で、金沢東別院は昭和三十七年七月二十四日、夫々、焼失した。築地本願寺は、戦災にも耐え、今日迄全く無傷である。

ので、更に今一本購入した。この所在地は茨城県結城町で、味噌醬由醸造元(氏名は失念した)の裏庭に生育していた。当店の記録通り、枝下七間  
目通り 一丈七尺位 直材

代金は一本一千五百円位だったと思う。写真の通り、この立木も、仁保氏所有のそれよりもひと廻り細かったが、劣らない立派な立木だった。木挽きは、常連の新潟県の中村

